

6 図書館の未来

～復権、拡張、再興、進化～



岡本 真
OKAMOTO Makoto

アカデミック・リソース・ガイド株式会社 / 代表取締役 / プロデューサー

図書館のもつ「無料」と「リピート」という特性は大きな集客能力を秘めている。このポテンシャルを活かしたまちづくりや、本来の役割にあるレクリエーションの部分が見直され、各地でさまざまな取り組みが展開されている。そして、さらに先を見据えた図書館の未来について考えたい。

集客施設としての図書館

2013年にリニューアルオープンした佐賀県の武雄市図書館は大きな注目を集めた。施設自体、建築的には元々高い評価を得ていた図書館であったが、図書館とカフェを大胆に組み合わせ、さらには書店機能を複合させたリニューアルは年間約100万名の来場者を集めるまでになった。もちろん、この取り組みへの賛否はあり、このリニューアルに至る行政的なプロセスには疑義も寄せられている。「功罪相半ば」という表現が妥当と思うが、新・武雄市図書館の登場は、図書館に対する社会の関心を大いに高めたことは事実である。



写真1 長崎市立図書館

とはいえ、100万名の来場があったという点については慎重に評価すべきだろう。というのは、これ以前から年間の来場が100万名を超える図書館は存在したからだ。たとえば、2008年オープンの長崎市立図書館(写真1)、2011年オープンの東京都武蔵野市のひと・まち・情報 創造館武蔵野プレイスと、熊本市のくまもと森都心プラザ図書館(写真2)はオープン早期から年間100万名の来場を達成していた。その意味で武雄市図書館のリニューアル時点での100万名という数字は、決して驚異的な数字ではなくなっていたのだ。

もちろん、人口規模を考えると、一概に比較しても意味はないが、重要な点として次の点を強調しておきたい。図書館はいまや100万名の年間来場数の達成に一喜一憂する存在ではない。むしろ、少なくとも新規開館にあたっては50万、100万といった数字がなかば期待される集客施設となっているのだ。

復権する図書館

さて、なぜ図書館がそれだけの来場者を獲得するようになったのだろうか。そもそも現在はやや頭打ち傾向・微減傾向がみられるが、過去20年ほどをみれば、公共図書館の利用者は増加の一途をたどってきた。増加の背景には施設数そのものの増加もあるが、景気低迷による消費意欲の鈍化とそれ

に伴う公共施設利用の促進、さらにはものごとを「シェア(共有)」する価値観の浸透もあるだろう。そういった社会全体の背景があり、また大型ショッピングモール型のビジネス開発が行き詰まりを見せるなかで、そもそも図書館が持っていた集客力の潜在的な可能性があらためて評価されているのだ。

では、図書館の集客面におけるポテンシャルとは何だろうか。それは「①利用が無料であること」「②借りた本を返すために繰り返し利用する仕組みであること」の2点にある。少なくとも公立の公共図書館は図書館法において、「入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」と定められている(無料原則)。このため、たとえば家族連れでの利用にあたっては、図書館自体で直接的に消費活動は発生しない。当然、現在の経済環境下では使いやすく通いやすい施設と映る。また、貸出と返却というサイクルがある以上、一般的には貸出期間が2週間以内に設定されているため、単純計算すればひと月に2回の来訪(リピート)が見込まれるのである。

「無料」と「リピート」というこの2つの特性をみれば、図書館という施設が実は大きな集客能力を秘めていることは歴然としているだろう。

にぎわいの核としての図書館

当然、この図書館のポテンシャルは「にぎわい」や「まちづくり」、「中心市街地活性化」という文脈に位置づけて理解され、実際の計画に反映されている。複数の機能を一つの施設にあわせつつ複合施設を計画するに際しては、集客能力に富む図書館をその核に配置し、図書館が引き寄せた来場者を周囲の施設やエリア全体に流し込むという発想が各地で展開されている。

かくして、インターネット時代にはもはや不要な機能・施設ととらえかねない現代において、図書館はその評価を大きく変えている。にぎわいの核として図書館は再評価されているのだ。実際、すでに各地で図書館を核とした地域開発が執り行われている。その代表的なものの一つが、補助金に頼らない新しい公民連携を模索する



写真2 くまもと森都心プラザ図書館

挑戦的な取り組みである岩手県紫波町のオガールプロジェクト(写真3)だろう。この取り組みでは複数予定されている施設計画において、中核的な役割を図書館が担っている。詳しくは猪谷千香著『町の未来をこの手でつくる-紫波町オガールプロジェクト』(幻冬舎、2016年)を読み込むのがよいが、図書館を明確に計画の中心に位置づけ、かつ成功へと近づきつつある取り組みだ。

図書館の拡張、あるいは図書館の再興

いま、紫波町のオガールプロジェクトを挙げたが、もちろんそれ以外にも図書館を核とした試みは各地で相次いでいる。しかし、そこには厳しい現実も少なからず広がっている。確かに図書館はにぎわっているが、その周辺地域にはそのにぎわいが波及していないというケースも確かにある。思い描いたほどの成果があがらない理由はさまざまだろう。その一つには核として据える図書館の役割について、十分な検討がなされているか、その差が結果の差につながっているケースもある。

では、図書館の役割とは何だろうか。昨今のトレンドをまず見てみよう。冒頭でふれたカフェを併設する図書館は武雄以前から実は相当数存在している(『ライブラリー・リソース・ガイド』第12号「図書館×カフェ」特集参照)。また時代の要請にあわせて、託児機能の提供を行う図書館も現れてきている。さらに先に挙げた武蔵野プレイスや2010年にオープンした塩尻市市民交流センター(えんぱーく)のように、図書館機能と市民交流機能が複合的に重ねあった施設も登場している。つま

り、図書館と言えば、まずは本の貸し借りというイメージが強いだろうが、昨今の図書館はその姿を大きく変え、「公民館の進化版」とでもいべき変化を遂げつつある。言ってみれば、図書館という言葉の意味する範囲は大きく拡張してきているのだ。

さて、ここで法律を紐解いてみよう。公立の公共図書館に関して言えば、その法的定義は明確で「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」だ。これが図書館法の規定する図書館のあり方である。よく見ると「レクリエーション」という言葉が入っている。「楽しみ」や「娯楽」あるいは「休養」を意味するこの言葉は1950年にこの法律が成立したときから一貫して変わらないものだ。となると、先に挙げたカフェ等は必ずしも図書館の意味の拡張というほどの話ではなく、従来から理念としては存在したが、強くは意識されていなかった図書館の役割の再興と言えるかもしれない。

図書館の進化

一見すると、「拡張」と「再興」に大きな差はないように思われるかもしれない。しかし、ここでの区別は明確にしておきたい。従来からある図書館法は決して錆びついた古い法ではない。そのことはすでに述べたように図書館法が定めた図書館利用の無料原則が、現在において大きな役割を果たしていることから推測できるだろう。一見現代的に見える「新しさ」をもって伝統的な価値観を安易に貶めても、なんら生産的ではない。この点では、カフェがある図書館は新しく現代的といった主張や理解には慎重であるべきだ。新しそうに見える主張は、それが実は単にこれまで広範には実現されていなかった事柄でしかないことがあるからだ。

と同時に、未来に向けて変化が求められているのは、いま図書館が直面している現実でもある。ではどのような変化が図書館に求められているのだろうか。インターネットの存在はすでに現実そのものであり、図書館も一定の対応を行ってきている。実際、2008年の図書館法改正によって、図書館が収集する資料の対象として「電磁的記録」が加えられている。つまり、インターネッ



写真3 オガールプロジェクト

ト等の電子情報も図書館にとって扱うべき対象とすでに規定されているのだ。

要するに、いまさらインターネット云々が図書館にとっての変化や未来ではない。それはもはや現実の一部でしかない。そうではなく、図書館が向かうべき変化や未来は、特にインターネットが大きく促進した私たちの知的創造活動のさらなる促進ではないだろうか。図書館は「必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供する」機能を持つわけだが、時代はすでにその先に進んでいる。私たちは入手した情報・知識に基づき、新たな知識の再創造と発信を容易に行える時代にいる。そうであれば、図書館はすでに創造された情報・知識の収集・整理・保存・提供という循環サイクルを担うだけでなく、そこに再創造を加えた知的活動の循環サイクルを担うべきではないだろうか。なお、まだ最初の一步の段階ではあるが、実際にこのような問題意識に立つ図書館は県立長野図書館をはじめ現れつつある。

進化パターン例としての“OUR LIFE LIBRARY”

さて、このような考えに立ち、私が営むアカデミック・リソース・ガイド社では“OUR LIFE LIBRARY”(図1)という進化した図書館のパターン例を提起している。図書館という器を通して、私たちは様々な情報・知識のインプットを受けている。そのインプットに基づいて想像を張り巡らせ、さまざまなアウトプットを創造していく。それがこれからの図書館の進化形ではないだろうか。

そのような考えを起点に実際に図書館の未来形・進化形を探っていくと、たとえば以下のような新たな役割が考えられるだろう(図2)。これらはあくまで一企業の提案に過ぎないが、大きな変化と進化に向き合う図書館の未来を占う手掛かりになるのではないか。

- 【編集室】情報・知識の循環サイクルに「発信」と「再創造」を付加する機能
- 【ゲームセンター】歴史的にも知的遊戯であるゲームで遊びながら学ぶ機能
- 【ガレージ】アナログからデジタルまで、現在の「ものづくり」を支援する機能
- 【リトリート】「なにもしない」という選択機会を保障する機能

【書斎】あえて一人で籠りきり、自分と向き合い創作・再創作に励む機能

すでに見てきたように、いま図書館は温故知新という言葉がしっくりくる環境にいる。伝統的な価値の復権という側面もあれば、環境適応的な進化の側面もある。そして、その温故知新の背景には、社会的に図書館が見直されているという文脈がある。この先も進化し続ける図書館の姿をとらえ、読者の方々一人ひとりのこれからの図書館観を編み直す一助に本稿がなれば幸いである。

注)“OUR LIFE LIBRARY”の全容はアカデミック・リソース・ガイド社サイト<<http://arg-corp.jp/>>でご覧いただけるほか、冊子の無償頒布も行っている。



図1 “OUR LIFE LIBRARY”



図2 図書館の新たな役割